## 取締役・教室長 吉元 和彦さん

その情熱を教育に注ぐ。 俳優を目指し、渡米までした男はいま

塾の先生が勧めてくれた すべての始まりは、小学生のとき。 変えることを知っているから。 「知る喜び」が子どもたちを

冊の分厚い本だった。

疾風の如く

ぜ、

がない人さえも、

『ことばの学校』 を通じて本の世 界にのめり込む 生徒たち

う。やがて高校三年生となった吉元、 力や自分なりの価値観のおかげだろ 読書によって育まれた豊かな想像 猛烈な違和感を抱く。「な けて動き出している姿に 仲間たちが大学受験に向

あまし、 を抱くようになったのだ。 次の「吉元らしい」ステージへと押 の世界的名作たちが、 し上げる。俳優になりたいという夢 部活動を引退した後は時間をもて レンタルビデオ店でアル

格的に演技の稽古に励みつつ、 文学部のダブルメジャーで学び、 優を目指して単身渡米。 のち、心配する母親を説き伏せ、 にも所属し多くの舞台にも立った。 卒業後は語学の専門学校に通った 塾人としての始まりは、 その後

戸与一の作品。社会問題も織り交

ある。

それも、

単に勉強のためとい

うより、自分が読んで面白かった本

を純粋に教えてくれていたことも大

吉元の人生の 中島先生や

ードボイルドの大家・船

き込まれる。

以来読書が大好きな

和彦少年は一気にその世界観に惹 生が読む本ではなかったが、吉元 ム的にも内容的にもおおよそ小学 ぜたその分厚い一冊は、ボリュー

歯車が回り始めたのは、 きかった。今思えば、

こうした本との出会い

う言って塾の先生が教えてくれた

の若き代表・中島先生は、

よくこう

して生徒に読書を勧めてくれたので

る老舗塾だ。

当時、就任したばかり

いまや三六年の歴史を誇 入谷にある『自由塾』。 子どもになった。

東京都台東区

「ほら、

これを読んでみな」。

**人生を変えたかもしれない一冊** 

タッフとして誘われたことだ。 らに訪れた自由塾で、 だけで食っていくのは難しいもので の有名劇団にも入っていたが、それ まさに渡りに船だった。 英語講師のス 日本

単身アメリカへ渡る

だったかもしれない

帰国した際、中島先生への挨拶がて





と思っていた。

就任していた。 になると、めきめきと頭角をあらわ 第に塾業務のほうに比重を置くよう た塾の仕事だったが、 気付けば自由塾の取締役にまで 驚くほどに奥深く楽し いざやってみ

トを始めたが、そこで触れた多く 吉元をさらに 演劇学部と ると、

## 「知る喜び」に気付 いた子どもたちへ けず

分の道を切り拓いてくれたことと重 ニング教材で、 ばの学校』は、 国語の授業はまた別に存在する。 は「国語」の授業ではない。塾として、 なったのかもしれない。ただ、これ めることを目的に開発されたeラー 書をすることで語彙力や表現力を高 されたのが『ことばの学校』だ。『こと を任されるが、そのとき教室に導入 「日本と海外、両方の教育を見てき 新教室の立ち上げとともに教室長 読書との出会いが、 朗読音声とともに読 吉元はこれに惚れ込 かつて自

科」ではない。 とばの学校』 土台として、読書をコモディティ化 英語や数学。そろばんや習字と同じ 本の読解力や語彙力があってこその たからこそ思うのですが、 したいんです」と語るように、 ように、子どもたちの可能性を拓く は、 さらにこう続ける。 吉元にとって やはり基

本質的には勉強も変わらないはずな スマホに置き換わっているだけで、 その経験が少なく、 喜びを感じます。勉強が苦手な子は、 なかったことを知ったとき、 「私がそうだったように、 んです」。 それがゲー 人は知ら

吉元は、そんな子どもたちの知的

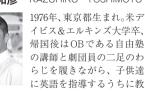
を選択 じている。教育とは、 最近では自ら図書館で本を借りる生 果の見えにくい教育ではあるだろ 通じて感じて欲しいのだ。 欲求を満たす新しい発見を、 む進路や人生を生きてもらうために。 確かに読書は、 しかしそれが何だというのだ。 ルの上でなく、 そう信じて 課題を発見・解決し、 確かな手ごたえも感 成績に直結した効 自らの意思で道 読書とは涵養 敷かれた 読書を

吉元 和彦

読書が教えてくれた喜びをキミに

知らなかったことを知る.

KAZUHIKO YOSHIMOTO



さに目覚める。入谷本部・日暮里 教室で都立中高一貫校の受検指導や英語を 担当したのち、2014年4月の町屋教室の開 校に合わせ、同教室の教室長に就任。趣味 はマラソンと靴磨き。

http://www.jiyujyuku.com/index.html

取材・文/松見敬彦(トリガーワークス)